

子宮頸がん予防ワクチン(HPV)の接種を検討しているお子様と保護者の方へ

子宮頸がん予防ワクチン(HPV)の「意義・効果」と「接種後に起こりえる症状」を確認し、検討してください。

子宮頸がん予防ワクチン(HPV)は、積極的にすすめることを一時的にやめています。

- 予防接種後に起こりえる症状(副反応): 主なものは、接種部位の痛みや腫れです。
- ・ 子宮頸がん予防ワクチン(HPV)には、サーバリックス®とガーダシル®の2種類があります。
- ・ 高い頻度で発生する副反応については、下表のとおりです。

発生頻度	ワクチン:サーバリックス®	ワクチン:ガーダシル®
50%以上	とうつう 疼痛・ほっせき 発赤・しゅちよう 腫脹、疲労感	とうつう 疼痛
10~50%以上	そうよう 掻痒、腹痛、筋痛・関節痛、頭痛	しゅちよう 腫脹、こうはん 紅斑

※ワクチン添付文書より

●まれですが重い症状が報告されています。

〈報告されている主な症状〉

- ・ 呼吸困難、じんましんなどを症状とする重いアレルギー(アナフィラキシー)
- ・ 手足の力が入りにくいなどの症状(ギラン・バレー症候群という末梢神経の病気)
- ・ 頭痛、嘔吐、意識の低下などの症状(急性散在性脳脊髄炎という脳など神経の病気)

●痛みやしびれ、動かしにくさ、不随意運動について

予防接種後に、広い範囲に広がる痛みや、手足の動かしにくさ、不随意運動(動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと)などを中心とする多様な症状が起きたことが報告されています。ワクチンを接種した後や、けがの後などに原因不明の痛みが続いたことがある方は、これらの状態が起きる可能性が高いと考えられています。接種については医師とよく相談してください。

●救済制度

予防接種は感染を防ぐために重要なものですが、極めてまれに健康被害の発生がみられます。万が一、定期の予防接種による健康被害が発生した場合には、救済制度があります。

●お子様が20歳になったとき

予防接種をした方も、子宮頸がん検診を定期的に受けてください。

子宮頸がん予防ワクチン(HPV)だけでは、全ての子宮頸がんを予防することができません。予防接種をしたお子様も、20歳になったら2年に1回は子宮頸がんの検診を受けましょう。

厚生労働省のホームページでは、子宮頸がん予防ワクチン(HPV)に関する情報をご案内しています。

厚労省 子宮けいがん

検索